

街談
巷議

中朝国境を見る

——中国、北朝鮮の将来に本格的な備えか

(中国研究所所員) 中島 宏

中国、北朝鮮国境を中国側から見る旅をして、約1300キロの国境のほぼ半分ほどを車で踏破した。時期は8月下旬から9月初めと、うわさされる北朝鮮の金正日総書記の健康問題が事実ならば、ちょうどたけなわの頃だが、その影は見えなかった。

国境は、中朝にまたがる長白山（朝鮮名白頭山）から北東に流れ日本海に注ぐ図們江（朝鮮名豆満江）と、南西に流れ黄海に至る鴨緑江の二つの川で構成される。全体として、のどかな農村風景が続く。表面的には意外なほどに平穏な国境だった。両河川とも川幅が狭い箇所が数多く、脱北者を防ぐのは容易ではなさそう。しかし北朝鮮の警戒強化で最近脱北者が目立たないという。中国側も密かに警戒を強めている兆候が各所に見られ、予想される北の何らかの混乱に備えているように思われた。また治安上に留まらず、総合的に中朝関係の将来を検討しているのも確かなようである。国境で見る北朝鮮側は、農村も町もなぜか異常なほどに人影が少なく、時々見かける工場の煙突からはほとんど例外なく煙が出ていない。他方、一部の森林伐採地を除き、開発が進んでいないだけに自然が残っているのが印象的だった。

コースはまず吉林省延辺朝鮮族自治州の州都・延吉市から図們江沿いに下って防川へ行き、その後、延吉方向に戻り琿春、図們へ。続いて国境沿いの三合、南坪、崇善を経て長白山。さらに鴨緑江沿岸の高句麗の旧都・集安から、ほぼ鴨緑江沿いに下り、河口の丹東を訪れた。

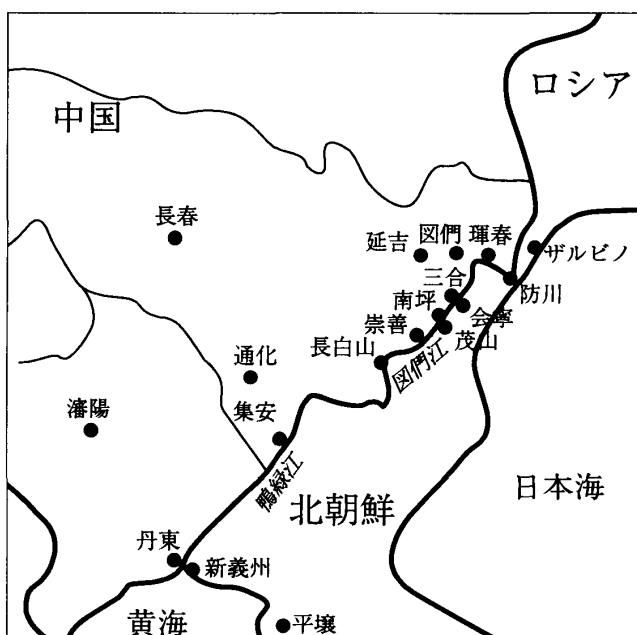
▼防川の中朝口国境

延辺朝鮮族の中心都市、延吉は人口45万人のうち朝鮮族が6割。昔に比べ比率は減少してはいる

が、少数民族地域の決まりで、あらゆる標識はハングル、漢字の両文字で書かれている。レストランも朝鮮料理店が圧倒的に多く、朝鮮文化の世界だ。韓国企業の進出と、外へ出た朝鮮族の送金で潤っているだけに、街には活気があり、新ビルが建ち、韓国人を中心に観光客も目につく。漢族の間では過度な韓国化が密かな心配のタネでもあるようだ。

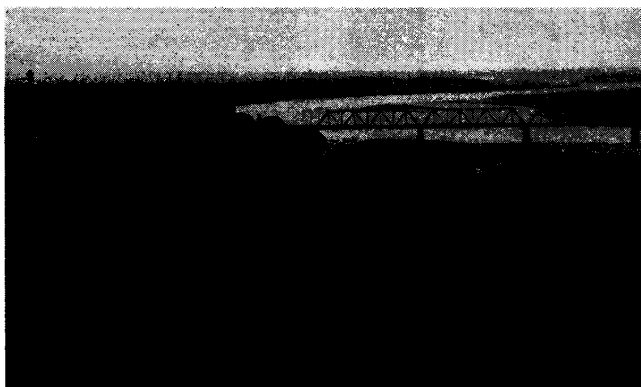
ここから防川への約180キロは高速と省道で快適なドライブ。防川風景区という看板が見えて間もなくのところに、1938年、日本軍とソ連軍が衝突した張鼓峰事件の民営展覧館があり、戦いの模様と当時の国際関係などを展示している。元工場職員の館長が個人で建てたという質素な展覧館だが、図們江からの中国の出海権を強く主張する幹部の発言が目につく。少し離れたところに見える小高い山が張鼓峰で、分水嶺に中朝国境が走っているという。

中国の北朝鮮、ロシアとの国境は、図們江が日本海に注ぐ15キロ手前の防川で終わり、その先は右岸が北朝鮮、左岸がロシア領になる。中国領が切れるところに防川展望台が設けられている。3国国境を一望すると、前方に朝口をつなぐ鉄道の



橋があり、遠くにうっすら日本海が見える。北朝鮮側の鉄道は、日本統治時代に建設され、図們江国境に沿って走る咸北線で、鉄橋はこの線の豆満江駅とロシア側のハサン駅を結び、ウラジオストック方面につながる。防川の少し手前には、延辺最大の中朝物流の通過地点、圈河口岸（税関）があるが、今回は近寄れなかった。

次の琿春市は、北朝鮮情勢が不安定なため休眠状態にある中朝口の「豆満江地域開発計画」の拠点。将来を先取りしてか、思ったよりも多くの新築のオフィスビル、マンション群も見える。まだ実際には多くが空きだというのだが。日本からは衣料関係の企業が進出している。ロシア領とも接するため、ロシアとの貿易を扱う長嶺子口岸があるが、これも立ち寄れなかった。



防川の中朝口 3 国国境。朝口の鉄道橋が見える

▼観光地化した図們的税関

延吉との距離50キロ、高速で30分の図們市の税関は、北朝鮮側を眺める上で人気の観光地。料金20元（320円）を払って大きな税関ゲートの屋上から備え付けの望遠鏡で北側の町、南陽を見ると、故金日成主席の肖像を飾った建物があり、ここだけは例外的に人影もあった。先の咸北線から中国側に分岐する鉄道の鉄橋も見える。川幅約100メートルの図們江に掛けられた橋（関東軍が戦前に建設）の真中までは、観光客も行くことができる。普段はいかめしい武装警察官も、観光客の記念写真のシャッターを切るサービス。観光地

化して収入も増えているからだろうか。武装警察は金回りがよく、人民解放軍がうらやむほどと言われているが、そんなムードに溢れている。

三合など3つの鎮も中朝の道路が通じ、税関があるが、警戒が厳重で建物に近寄ることは禁止。いずれも図們江の川幅が狭く、脱北者が多いところだ。三合鎮へは、図們から国境沿いに南下できるが、道が悪いため、延吉から間島省時代の中心都市、龍井市を経由して行った。延辺でも朝鮮族が集中して住むところで、28万の人口の7割を占める。日本時代の総領事館の建物があり、今は市人民政府になっている。抗日の朝鮮詩人尹東柱の生家があり、韓国人ツアーが必ず行くという。

三合鎮では、税関には近づけないが、近くの高台に望江閣と名づけられた展望台があり、写真撮影もできた。対岸の北朝鮮側の町、会寧が目前に広がり、税関のゲートに入る中国のトラックや、咸北線を走る列車なども見えた。ここは金正日総書記の実母、金正淑女史の生地、生家や展覧館などが中国側からのツアーの観光スポットになっている。多くの住宅が密集し、工場らしい建物や煙突もあるが、人気あまり感じられない。煙突からも煙が出ていない。

次の南坪鎮でも遠方から税関の写真が撮れるが、接近はできない。この辺は川幅が狭い上に、水量も少ない。いつでもすぐにひょいと渡れそう。すぐ近くにある、日本統治時代から鉄鉱石で有名な茂山からの鉱石を中国側に運ぶ際の通過地点だが、この日は何も動きがなかった。トラックが盛んに鉱石を運ぶところを見た人もいないので、時間のせいもあるだろうが、いずれにせよ活発に活動しているようには見えなかった。さらに国境沿いの道を20分ほど進むと茂山の町が見える。先の会寧よりもずっと多くの住宅がびっしり並ぶ大きな町だが、人影は大通りにまばらに歩いている以外に見当たらない。車も走っていない。煙突にも煙は全く出しておらず、沈滞した空気が感じられる。

この辺から、かなりな悪路で、道路の修復、拡幅作業が目立つようになる。2時間後によく崇善鎮に到着。脱北者の多い地域だけに、これまで以上に武装警察の警戒が厳重で、税関の前に行ったが、写真は禁止。近くに木材検査所があり、木材置き場が何箇所もある。

▼森林伐採が進む

三合から崇善にかけての山々の多くは緑で覆われているが、北側の山には森林を伐採し、畑になっているところが目立つ。よくもこんなところまでという高地に、まるでパッチワークのように畑がびっしり張りつく。中国側の畑作物から見て、同じようにトウモロコシや馬鈴薯だろうか。低地には水田が見える。区画整理ができており管理はよさそうだ。3つの税関とも旺盛な中国の木材需要に应运の木材積み出し口であり、北側の森林減少の原因になっているのだろう。他方、中国側の山々は緑で覆われている。以前から植林が熱心に行われたといわれ、また高地の畑作をやめて林に戻す「退耕還林」を実行しているらしいところも散見された。その上、中国では現在、全国的に木材伐採が厳しく統制されており、その分、北朝鮮からの輸入に依存していると思われる。

北朝鮮側の高地の畑は大雨があればひとたまりもないだろう。また、北の農業でしばしば指摘されるように、至るところが耕地で、輪作の余地がないため、畑作が不作の現象も考えられる。今は作物があるので緑で覆われているところも、冬になれば禿山になるはずだ。

崇善からさらに川沿いに2時間ほど南下すると人民解放軍の小さな基地があり、近くの川幅数メートルの対岸には、金日成が釣りをしたという岩がある。この辺は中国側の鉄条網が林の中に延々と続き、警戒厳重で写真も禁止。長白山までは原生林の中の一本道を走るが、沿道には通信線が張り巡らされ、ここでも道路の拡幅、修理作業が続いている。軍民両用だろうか。中朝国境の警備は

2003年以来、武装警察から人民解放軍の手に移されている。この地域の緊張した空気からみて、中国が脱北者の警戒だけでなく、今後の北朝鮮情勢の展開に備えているように見えた。

▼長白山の観光事業から朝鮮系排除？

長白山は満州族、朝鮮族の聖山であり、その上に抗日戦中のゲリラ闘争の基地ということで、金日成王朝の聖地でもある。国境地帯で最大の観光スポットだけに、多くの観光客で賑わっていた。昨年の観光客は中国人と韓国人で延べ70万人。日本人はまだ少ない。西麓の松江河鎮に設けられた国内向け空港も8月初めに開港、世界遺産登録を目指すなど、観光事業が本格化されようとしている。

観光の目玉は天文峰（2670メートル）から見下ろす火山湖の天池と近くの長白瀑布（落差68メートル）、それに豊富な温泉群。天池で晴れる日は珍しいというが、幸いにも快晴で、幻想的で広大な紺碧の湖面と周辺の山々の雄大な景色を堪能することができた。1962年の中朝国境協定で長白山系にも国境が引かれ、湖面は中朝で約2対3と北に有利に分けられている。長白山系の最高峰（2749メートル）も北朝鮮側にあり、將軍峰と呼ばれている。北朝鮮側の湖面近くには長い階段が設けられ、上から湖面に降りられるようになっているのが見える。中国側は瀑布の横に通路があり、湖面まで行けるが、暫く前に落石で壊れ、このルートは通行禁止だった。

長白山の中国側部分は延辺自治州に所属するが、3年ほど前から吉林省政府が環境保護の名目で、山の観光事業を一手に握った。自治州の権限は失われ、既に進出していた韓国企業なども排除されつつある。新空港も長白山の西口に近く、中国人客の大半は今までのように延吉を経由せずに山に来ることができるので、このことから朝鮮族外しと受け取る向きも多いという。国境協定は中朝初代の指導者同士の間で、過去の経緯からい

えば北朝鮮に有利ともいえる内容でもあるのだが、韓国内には金日成が聖山を中国に売り渡したとの不満もくすぶっている。この辺が結びつくと紛糾が表面化する恐れもあるだろう。

鴨緑江のほとりにある集安市には、高句麗が平壤に遷都するまでの旧都跡、高句麗第19代の広開土王（4-5C）の功績を称える好太王碑、その息子の長寿王（5C）の墓（將軍墳）、高松塚古墳との関係が取り沙汰される絵画がある貴族の墓などの高句麗遺跡群があり、2004年に世界遺産に登録された。いかにも古代の王都にふさわしい風光明媚なところだ。5年前に中国の学者が高句麗は中国の1地方政権と断定、古代朝鮮の王朝と考える韓国の猛反発を呼んだ。今も歴史論争の片はついてないが、それが逆に韓国人の高句麗ブームに火をつけているようで、韓国人ツアー客で大賑わいだった。ここも北朝鮮と道路、鉄道で結ばれ、税関がある。観光地としては警戒が厳重で、町に入る前に武装警察からパスポートをチェックされた。鴨緑江では船で北側の中洲に接近するツアーもある。

▼丹東の活況

中朝物流の8割を扱うという丹東は、対岸の北朝鮮・新義州との対比で、経済発展の大きな差異を見せつける都市でもある。特に夜に入り、夜景がきらびやかな丹東と暗闇の新義州の違いが著しい。日本が戦前に建設した鴨緑江に掛かる鉄橋2本のうち1つは「中朝友誼橋」と名づけられ、今も単線の鉄道と公道が走り、人と物の往来を引き受けている。もう1つは朝鮮戦争中に米軍の爆撃で新義州側部分が破壊されたまま。「断橋」と名づけられたこの橋は観光客用で、川を見ながら途中で切れた先端まで歩き新義州を観察する。橋のたもとから遊覧船が出て、やはり北側を見ることができる。なぜかここでも北側にはあまり人影がなく、多数ある煙突からも煙が出ていない。遊園地の観覧車も見えるが長年動いていないという。

その他の観光スポットは、市の後ろの山にある抗美援朝記念館のほか、鴨緑江を少し遡った郊外にある万里の長城最東端とされる虎山、その近くの「一步またぎ」など。川の中の踏み石を一步またげば北朝鮮側の中洲、于赤島に、というところ。小船で島の周囲を回るサービスがある。北の監視所があり、船の観光客がタバコなどを差し出すと、中から兵士が出てきて受け取るというが、我々は差し控えた。中国側が一昨年に関設けた鉄条網に対抗するかのようになり、北朝鮮が昨年夏、設置した新しい鉄条網が延々と続いている。ここへ行く途中に中国が北朝鮮に供給する石油の貯蔵所が見える。鴨緑江の川底を走るパイプラインにつながっているところだ。

中朝の国境協定では国境の川の中洲も分けたが、中国が北朝鮮側に譲ったところが多い。北領となった中洲のほとんどが今も未開発で、手つかずの自然が残されている。丹東市内の中朝友誼橋から少し上流に威化島という大きな中洲がある。国境画定でこれを北側に譲ったことが、文革中、当時の国家主席、劉少奇の罪状の1つとされたという因縁があるところ。新義州からの簡便な橋が掛かっている以外は今も自然のままだ。

丹東では、北朝鮮との貿易でリスクが大きい、利益も大きいというビジネスも盛んらしい。戦前に日本総領事館があったところなど山手の高台や川沿いには高級マンションも立ち並ぶ。市内の税関に行くと、北朝鮮へ行く貨物を積んだトラックや、様々な品物を抱えた中国商人、北朝鮮からの商人たちが検査を待っていた。まだ規模は小さいとはいえ、北との関係が丹東の意外な活気背景であるのは確かだ。一時、期待された新義州経済特区問題は、02年に頓挫して以来動きがないという。

戦前、3万人はいたという日本人の活動は今はほとんどなく、在住者もボランティアの日本語教師など10人程度。居住環境の良さなどから見て日

本人がもっと関心を持ってもよい都市である。

▼朝鮮族人口の減少に悩み

延吉で朝鮮族の専門家に話を聞くと、延辺自治州の最大の悩みは、朝鮮族の人口減少という。改革開放が始まると、元々教育レベルが高かった朝鮮族の都市化が進んだ上に、韓国の対中進出が外への流出に拍車を掛けた。国内各地はもちろん韓国や日米などにある韓国企業への就職で、朝鮮族の移転が進んでいる。現在自治州の人口218万人の中で、朝鮮族の比率は38%と言われるが、実際にはさらに少ない可能性があり、今後、減少が続けば自治州の地位を保てない恐れがある。とはいえ中国政府は、将来、統一朝鮮が誕生した場合、自治州の存在がトラブルのタネになる可能性を考えれば、縮小した方が望ましいと考えているのかもしれない。

この専門家はさらに北朝鮮関係では①北が現在の体制下にある限り、いろいろなものを各国から引き出せる核を手放すことはない②北の核保有は日本、韓国などへのドミノ現象の懸念と、今は米国向けだが、将来、中国向けになる恐れもあり支持できない③中国は、北が米国と組んで中国を外してしまう可能性を恐れ、強く出ることができない④学者レベルでは既に、将来の朝鮮半島を「安定した統一朝鮮」と想定しており、その場合でも歴史的、文化的に朝鮮が中国から離れることはないと考えている——と、相当に覚めた見方をしているのが印象的だった。

▼中朝の微妙な関係

北朝鮮へ最近旅行した人の話では、北への中国人旅行者は益々増える一方で、平壤、羅津には中国人向けのカジノもあり、北朝鮮各地で見かける商品の8割は中国製品で占められ、北が事実上、中国経済圏に入ってしまった観があるという。他方、延辺の専門家によると、中国が近年取り決めた大型プロジェクトは、当初、予想されたほどには動いていない。今度見たところでも、先の茂山

の鉱山は、3年前に中国企業に50年間の独占採掘権が与えられたにしては沈滞したままだ。防川近くの圈河から北朝鮮の羅津までの道路補修計画や、丹東での第2の橋の建設案で、中国側が熱心に提案しても、北が乗って来ないという。

今回、中朝国境を見て、両国間に日本統治時代から存在する数々の道路と鉄道の接点、中国内で進む国境沿いの道路インフラの整備が改めて印象づけられた。北朝鮮への経済進出で、中国は圧倒的に優位な立場にある。それだけに北朝鮮側は、現状で中国側の提案に乗ると、怒涛のような中国の進出により、経済の実権を完全に握られてしまうのを恐れているのかもしれない。あるいは米ロなど他の国を巻き込んでの開発を考えているのだろうか。北朝鮮が羅津とハサンを結ぶ朝口鉄道の改修にまず手をつけているのも暗示的である。

吉林省の悩みは防川で国境が途切れ、日本海への出口がないこと。羅津への中国の道路補修計画案も日本海ルート進出が目的だが、北はこれに協調的とはいえない。また中国側が熱望する、琿春から図們江を下って日本海に出るルートも、ロシアと北朝鮮の同意が必要だ。その中で9月初め、中国の琿春からロシアのザルビノ港経由で韓国の束草、日本の新潟を結ぶ定期航路の協定が結ばれた。北朝鮮を外す形で、中国の長年の悲願である日本海進出が実現するこの協定は、昨今の中朝のドライな関係を象徴している。

こうした現状を背景に、中国は近年、朝鮮半島の統一を含む、その将来を想定しながら、総合的な政策検討を加えてきたふしがある。国境地域の歴史研究「東北工程」もその一つだろう。今回の旅行で散見した中国の諸政策——対北朝鮮経済プロジェクト、高句麗の歴史解釈、吉林省による長白山の観光事業の掌握、国境での厳戒態勢など——は、いずれも、そうした総合的な検討の結果なのだろう。そこにはすべて国益を守ろうとする実利的な政治意図が貫かれているように見える。(了)